

研究報告

北海道における金属回収令（戦時下）の対象となった銅像

～明治期から戦前の建立の歴史～

島津 彰¹⁾ 武石 詔吾²⁾

1) 北翔大学北方圏学術情報センター学外研究員 2) 北海道屯田倶楽部

抄 録

社会活動の各分野において多くの業績を残した人物を讃え、顕彰する形態の一つに銅像の建立がある。北海道におけるそうした人物の中から銅像を取り上げ、①建立年、②建立地、③制作者、④設置者⑤銅像対象人物の足跡・業績について調査した。銅像は建立後不動と思われるが、明治期から戦前までに建立された銅像は、昭和18年の「勅令：金属回収令」の対象となり撤去され、軍人を除いて戦後再建の道を辿った。

銅像の建立の経過をみると明治期は軍人や開拓使の役人、大正期は教育者、昭和では実業家、地域の開拓者、教育者の建立がみられる。本稿では、対象人物の社会活動の分野や建立地の変化、設置母体の変化を概観し、変化の過程等について検討し、建立の歴史的意義について考察を試みた。

キーワード：金属回収令、北海道開拓、銅像、明治、戦前

I. はじめに

史実を後世に残す媒体は多様であり、その一つに銅像がある。銅像は、社会活動の各分野で業績を残し、後世の社会の発展や人々の生活に多大な恩恵や勇気等を与えた功績を讃えた人物が主である。中には南極を越冬したタロー・ジローや忠犬ハチ公のような動物をモチーフに建立された銅像もあるが稀有である。

1. 金属回収令

銅像の材料の基本は青銅であり、銅像は建立後にその場所から移動したり姿を消したりすることなく、不動と思われているが、我が国の銅像は明治期から戦前まで建立された銅像の場合、金属回収令によって供出された。金属回収令は、当初は金属資源の不足を補うために任意で供出していたが、日中戦争から太平洋戦争にかけて戦局の激化に伴い、武器生産に必要な金属資源を強制的に供出するための目的で制定された勅令（昭和18年（1939）8月12日勅令第667号）である。

昭和20年（1945）に回収対象にアルミニウムを追加する等、改正が行われた。この勅令は、18条と附則から成り立っていた。附則には供出の対象を国内はもとより統

治下にあった朝鮮、台湾、樺太、南洋群島等も明記されていた。供出の対象は、伊藤博文、板垣退助等の人物を始め、北海道においては黒田清隆をはじめ後述する人物の銅像が供出の対象となった。人物だけではなく大仏像、マンホール、お寺の鐘、廃線になった鉄道のレール、一般家庭の鍋、箆の引手等も対象であった。

2. 金属回収時の儀式

銅像の供出の際は、「銅像供出回顧顕彰壮行式」が行われた。札幌では昭和18年（1943）7月8日から28日まで行われた。式次第は①銅像を白布で巻く。②赤たすきをかける。③人物を回顧。④業績を讃える。の流れでの顕彰が行われた。戦後、軍人を除き再建された銅像が多い。

後述する、木下成太郎は供出を免れた、稀有な例であり、本州に於いても皇族や大隈重信などが僅かに供出を免れた。

II. 時代区分から見た銅像の建立

本稿では、明治期から戦前に建立された銅像について、時代に即し、建立順に①建立年、②建立地、③制作者、④設置者⑤人物の足跡・業績等の銅像建立の歴史的

意義とその考察を試みた。

1. 明治時代

1) 黒田 清隆

- ① 建立年 明治36年（1903）
- ② 建立地 札幌市大通西7丁目
- ③ 制作者 長沼守敬
- ④ 設置者 「故従一位大勳位黒田伯爵銅像建設会」
総代・対馬嘉三郎
- ⑤ 黒田 清隆（1840-1900年）は、天保11年（1840年）薩摩藩士の黒田仲佐衛門清行の長男として、鹿児島城下新屋敷で出生。藩命で江戸の江川塾で砲術を学ぶ。文久3年（1863）の薩英戦争をはじめ多くの戦いに参加した。また、西郷隆盛に従い薩長連合のとりまとめに奔走した。戊辰戦争の最後の戦いであった箱館戦争では政府軍の参謀を務め榎本軍に勝利した。新政府では外務・兵部大掾等を歴任した。明治3年（1870）5月、開拓使の次官に就任し、同年10月、黒田は、北海道と樺太を視察して、太政官に北方経営に関する建議書を提出した。その中の主要な事項としては、「政治の中心地を石狩国に鎮府を置く、風土の似た外国から開拓の専門家を招く、留学生を派遣して海外事情を学ばせる」等である。



写真1 札幌市公文書館蔵

明治4年（1871）1月、留学生を伴い米国に渡り、同郷で初代米国弁務官の森有礼の仲介によりアメリカ合衆国第18代グラント大統領と面会し、北海道開拓の指導者を要請した。その結果、現職の農務長官ホーレス・ケプロンの招聘に成功した。ケプロンは、明治4年（1871）7月、来日した。ケプロンの職名は開拓使御雇教師頭兼開拓顧問で、北海道開拓のための調査の実施及び開拓のランドデザインと方針を示した。黒田は、その内容

を「開拓10年計画」に策定した。具体的には、「外国人技師の招聘、留学生の派遣、官営工場の設置、海陸運輸の整備、札幌農学校の設置、農鋦業の振興、屯田兵制度の創設、集治監の開設、移民の促進」等で、明治5年（1872）から取り組んだ。開拓使は、当初から10年の開拓計画が終了する明治15年（1882）に閉庁する予定であったが、黒田は、事業の継続の必要から開拓使の存続を強く主張したが受け入れなかった。そこで、黒田は、事業を継承させるために部下を下野させ会社を設立し、その会社に開拓使の事業の工場、牧場、船舶、倉庫等を下付けをするといういわゆる「官有物下付け事件」を起こし、世論及び明治政府内部からも反対が起こり払い下げを断念した。明治15年（1882）開拓使は既定通り閉庁された。

既述のように黒田の強力なリーダーシップのもとに進められた諸施策は今日の北海道の基盤を築いたことから、黒田を称して「北海道開拓の祖」と呼ばれる所以である。黒田の功績から総代対馬嘉三郎（初代札幌区長）が呼びかけ、委員長永山武四郎等による「故従一位大勳位黒田伯爵銅像建設会」が中心と銅像が建立された。（注1）

この黒田像は、昭和18年（1943）、金属回収令の対象になり供出され、台座のみが残った。

2) 東郷平八郎と大山巖

東郷、大山巖ともに①～④は同じ。

- ① 建立年 明治39年（1906）
- ② 建立地 七飯町大沼公園
- ③ 制作者 大阪島工場
- ④ 設置者 「建設期成発起人会」：代表・宮川 勇

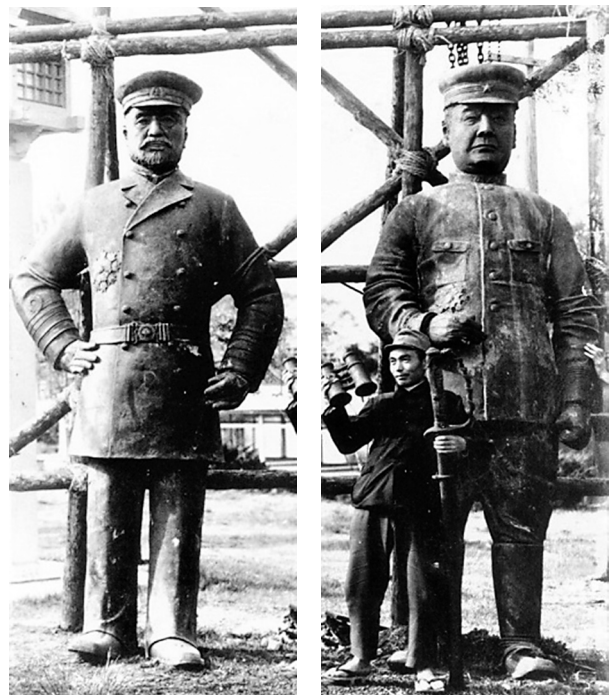


写真2 左より東郷像、大山像・七飯町歴史館蔵

○東郷平八郎

東郷平八郎（1840－1934）は、鹿児島城下加治屋町で出生。

明治4年（1871）～11年（1878）、イギリスに留学。明治27年（1894）の日清戦争では「浪速」の艦長。明治37年（1904）の日露戦争では旗艦「三笠」で連合艦隊司令長官として指揮をとり、明治38年（1905）の日本海海戦では、当時、世界有数のバルチック艦隊を全壊させた。この勝利によって東郷は国民的英雄になった。

小国の日本が強国ロシアを破ったことは世界中からは驚異に見られ国際的な地位も向上し、「5大国」のひとつに数えられた。その後、東郷は、東宮御学問所総裁として、昭和天皇の教育を担当した。

○大山 巖

大山 巖（1842－1916）は、鹿児島城下加治屋町で出生。

江川塾で砲術を学ぶ。明治3年（1870）～明治6年（1873）、フランス、スイスに留学。

日露戦争では満州軍総司令官を務めた。その後、文部大臣、内大臣等を歴任している。両者ともに金属回収令の対象となり供出され、戦後再建されなかった。

東郷像と大山像の建立は、業績を讃えるより、観光客誘致の営利が目的であった。函館在住の宮川勇なる実業

家が風光明媚な大沼公園を観光地にするために明治36年（1903）に旅館を建設した。更に、観光客を誘致するために日露戦争を勝利に導いた当時国民的英雄であった東郷と大山2人の銅像建立のために意図して「建設期成発起人会」を設立した。宮川はこの会の代表を務め2人の銅像に貢献した。（注2）

3) 大迫 尚敏

- ① 建立年 明治40年（1907）
- ② 建立地 札幌市中島公園
- ③ 制作者 島佐真工
- ④ 設置者 「発起人会」代表・若狭謙吉
- ⑤ 大迫 尚敏（1844－1927）は、1844年（天保15）薩摩藩士大迫新蔵の三男として出生。

薩英戦争に従軍。戊辰戦争に従軍後、陸軍近衛兵。明治33年（1900）陸軍中將、永山武四郎の後任として、第七師団第2代師団長に就任した。明治37年（1904）日露戦争の際、旅順要塞攻撃のため同年8月、大迫師団長指揮のもと、第七師団が出征した。二百三高地の攻撃、その後の奉天合戦に参戦。明治39年（1906）3月帰国。同年5月大將に昇進。

このような功績から「札幌・大黒座（後の松竹座）」の創業者・若狭謙吉等を中心に発起人を結成し、建立の取り組みが行われた。（注3）後に学習院長を務めた。金属回収令の対象となり供出された。戦後再建されなかった。

4) 永山 武四郎



写真3 札幌市公文書館蔵（大迫尚敏像）



写真4 札幌市公文書館蔵（永山武四郎像）

- ① 建立地 札幌市大通西3丁目
- ② 建立年 明治42年（1909）
- ③ 制作者 久野留之助
- ④ 設置者 「故永山將軍銅像建設実行委員会」
代表・井上角五郎
- ⑤ 永山武四郎（1837-1904）は、1837年（天保8）薩摩藩士永山盛広の4男として出生。

明治元年（1868）戊辰戦争の会津城攻略に参戦し、先陣をきる戦いが認められ陸軍大尉。当時、陸軍兵制をイギリス式かフランス式かが議論され、永山は出身の薩摩藩がイギリス式を採用していたのでイギリス式を主張したが敗れ、陸軍を辞職し、明治5年（1872）開拓使に入った。明治6年（1873）北海道の防衛と開拓を目的とした「北海道兵備設置の件」を時任為基等と右大臣岩倉具視に建議書を提出した。その後、黒田清隆は、永山らの建議を踏まえ「屯田兵制施行」の建白書を上奏し、明治7年（1874）屯田兵条例が設けられ屯田兵制度が創設された。

明治8年（1875）琴似に最初の屯田兵が入植し、順次、兵村が設置され、明治37年（1904）屯田兵制度が廃止されるまでの30年間に道内各地に37兵村が建設され、約7300戸、4万人の入植し、北方の防衛や北海道開拓に大きな足跡を残した。その後、明治11年（1878）第2代屯田事務局長、明治18年（1885）屯田本部長、明治20年（1887）約1年間ロシア、米国、清国等を視察。明治21年（1888）第2代北海道庁長官、明治22年（1889）屯田司令官等を務め明治23年（1890）屯田兵条例を改正し、屯田兵に応募できる資格を士族のみであったものを平民も応募できる道を開いた。永山は、北海道の内陸部の開拓の中で特に上川地方の開拓に力を入れ、永山、当麻、東旭川に兵村を開いた。

更に、明治21年（1888）、第2代北海道庁長官時には屯田兵司令官を兼ねて道東方面の開拓のために中央道の開削を命じた。その建設には空知・釧路集治監の多くの囚人の使役によって行われた。その結果、明治23年（1890）以後道東方面に屯田兵村が経年的に設置されていった。

また、北海道庁長官に就任した際、先に申請をしていた上川離宮構想が内閣総理大臣山縣有朋から許可され、旭川市神楽岡丘陵一帯に10万余坪を離宮予定地として選定したが、明治27年（1894）日清戦争が始まると札幌の反対等が起こり上川離宮構想は消えた。その証として上川神社境内に「史跡上川離宮予定地」の標柱が立っている。明治28年（1895）札幌に臨時第七師団が設置され司令官、明治33年

（1900）第七師団旭川に移転し、第七師団初代師団長に就任した。旭川市永山の地名は、兵村の命名にあたり明治天皇に拝謁した際に「永山を名乗るように」と言われたことによる。

なお、戦前の開拓使・北海道庁等の長官の中で、札幌に私邸（旧永山邸）を持ち残し、墓碑があるのは永山ただ一人である。永山の功績を讃え、井上角五郎（北海道炭鉄鉄道会社社長）を委員長とした「故永山將軍銅像建設実行委員会」を中心となり銅像が建立された。（注4）金属回収令の対象となり供出され、戦後再建された。

2. 大正時代

1) ウィリアム・S・クラーク



写真5 札幌市公文書館蔵

- ① 建立年 大正15年（1926）
- ② 建立地 北海道帝国大学構内
- ③ 制作者 田嶋 碩朗
- ④ 設置者 札幌農学校・同窓会
- ⑤ ウィリアム・S・クラーク（1826-1886）は、1826年（文政9）マサチューセッツ州で出生。

アマースト大学卒業後、南北戦争に北軍の少佐として従軍。開拓を進めるために農業の専門学校の必要からマサチューセッツ州立農科大学を創設し学長に就任。専攻は園芸学、植物学等。外国人技師の一人として、マサチューセッツ州立農科大学の学長の職を1年間休職し明治9年（1876）7月ペンハロー等を伴って「札幌学校」に赴任した。札幌学校は翌月「札幌農学校」に名称を変更した。クラークの職名は「教頭」であるが、開拓使はクラークの職名を

Presidentと表記することを許可し、実質的には校長職であった。就学期間は4年間、教育内容は農学・物理等西洋の発達した科学を取り入れ、実技に重点を置く等であった。

クラークの教育方針は「野外等での実学の重視、農場での労働、軍事訓練、聖書を取り入れる」等で専門の植物学だけではなく、自然科学一般を英語で教えた。クラークは、明治10年（1877）4月16日帰国に当たり、札幌郡月寒村島（現、北広島市島松）で、見送の学生、職員等に向かって発した「Boys be ambitious」は、名言である。クラーク像の建立は、札幌農学校（当時は北海道帝国大学）開校50周年記念事業の一環として札幌同窓会が企画し、東京芸術大学の卒業生の田嶋碩朗に依頼して制作された。（注5）奇しくもクラークの生誕百年でもあった。金属回収令の対象となり供出され、戦後再建された。

3. 昭和時代「戦前（昭和16年まで）」

1) 広井 勇



写真6 広井勇先生胸像企画委員会から転載

- ① 建立年 昭和4年（1924）
- ② 建立地 小樽公園
- ③ 制作者 水谷 鐵也
- ④ 設置者 実行委員会（朋友・門人）
- ⑤ 広井 勇（1862-1928）は、1862（文久2）、現在の高知県佐川町の土佐藩御納戸役を務める広井喜十郎の長男として出生。

11歳の時叔父である男爵片岡利和邸の書生。工部大学校を経て、明治10年（1877）札幌農学校二期生として入学した。ウィリアム・ホーラから土木学を学んだ。札幌農学校卒業後、開拓使、工部省に勤務し、その後、私費でアメリカ、ドイツに留学、ミシシッピー川改良工事、鉄道橋梁工事の現場で働き土木に関しての経験を積んだ。この経験をもとにまとめた論文「プレート・ガーダー・コンストラクション」アメリカの大学の教科書として使用される程、高く評価された。

帰国し、明治22年（1889）母校の札幌農学校土木工学教授に就任した。更に、明治26年（1890）札幌農学校教授兼任で初代小樽築港事務所長に就任した。

広井が考案した画期的なことが2つあった。一つは、コンクリート製造で、海水に強いコンクリート増強方法としてセメントに火山灰を混入し製造した。他の一つは、傾斜させて斜塊ブロックという特殊な工法を開発した。また、波の最大の力を求めるため、波力の現地観測を行い、波力算定方法として編み出した「広井公式」は、防波堤建築にあたってひろく世界中で使用されていた。

明治30年（1897）5月、広井は、自身が編み出した「広井公式」に基づき、小樽港内に国内初の本格的な外洋防波堤としての北防波堤第一期工事の指揮をとり、明治41年（1908）6月、日本初の1289mのコンクリート製長大防波堤を完成させた。その後、学外出身であるにもかかわらず東京帝国大学土木学科初代教授に就任し、橋梁、鉄道設計等の指導をした。晩年は土木学会会長に就任した。「港湾工学の父」と呼ばれている。築造から100年以上経た北防波堤が「現在も使われているのは驚異的」とよばれ平成12年（2000）土木遺産に登録された。

広井の門下からは、後述する伊藤長右衛門をはじめ多くの優れた人材が輩出された。広井は、防波堤建設のみならず明治21年（1888）に竣工した「北海道旧本庁舎（通称「赤レンガ庁舎」）の頂上に設置されていると八角塔は、強風が吹くと揺れる、騒音、雨漏り等の建築上問題があった。撤去が検討され最終的に判断したのは広井で、明治29年（1896）に撤去された。この建物は、明治42年（1909）に火災に遭遇、復旧の際にも八角塔は再現されなかった。昭和42年（1967）北海道開道百年記念事業の一環として71年ぶりに八角塔が再建された。

更に、大正13年（1924）に完成した3連のアーチ橋として名橋であった「豊平橋」の設計した。銅像は、昭和3年（1928）朋友や門人が実行委員会を組

織され取り組まれた。（注6）金属回収令の対象となり供出され、戦後再建された。

2) 荒井 初一



写真7 荒井建設株式会社蔵

- ① 建立年 昭和4年（1929）
- ② 建立地 上川町層雲峡
- ③ 制作者 田村 審火
- ④ 設置者 「建設実行委員会」（代表・斎藤弥三郎）
- ⑤ 荒井初一（1873-1928）は、富山県砺波で出生。

明治26年（1892）、北海道にわたり小樽で米穀店に勤務。翌27年（1894）旭川出張所を任される。同年独立して今日の荒井建設の母体となる「荒井商店」を創業。明治37年（1904）土木請け負いの「荒井組」を創設した。

峡谷や紅葉の美しさで有名な道北の景勝地のひとつの上川町層雲峡は、現在から100年前、塩谷水次郎郎によって温泉が発見され、塩谷温泉と呼ばれていた。大正時代に入り、塩谷温泉は世の中に知られるようになった。大正8年（1919）大町桂月によって「層雲峡」と命名された。大正11年（1922）塩谷家から荒井に温泉の権利書が譲渡された。当時、新井組は、温泉近くで石北本線の敷設の工事を担当していた。荒井は、従業員のための宿泊所を建設した。それが後の層雲閣となるのである。

荒井は、大正12年（1923）温泉事業を始めた。荒

井は、大正13年（1924）上川から層雲峡までの内、清川から層雲峡間約12kmの道路。更には、層雲峡の石狩川に架橋等の建設等に巨額な私財を投じ交通インフラの整備を行った。

更に、大雪山調査会を設立し、学術的（植物、動物、地質、気象等）調査と自然環境の保護、登山道の整備等に取り組んだ。このような功績により、死後1年後の昭和4年（1929）、旭川商工会議所斎藤弥三郎他8名の有志によって上川町層雲峡に「荒井初一」の銅像が建立された。（注7）金属回収令の対象となり供出され、戦後再建された。

3) 佐藤 昌介



写真8 北大公文書館蔵

- ① 建立年 昭和7年（1929）
- ② 建立地 北海道帝国大学構内
- ③ 制作者 加藤 顕清
- ④ 設置者 北大農学部が中心
- ⑤ 佐藤 昌介（1856-1939）は、1856年（安政3年）、南部藩士、佐藤昌蔵の長男として現在の花巻市で出生。

盛岡の作人館では、後に内閣総理大臣となる原敬と共に漢学の修行をした。佐藤は、上京し東京の大学南校（現東京大学）に入学したが病気のため退学し、その後、東京英語学校で学び、明治9年（1876）、札幌農学校の第1期生として入学。クラークの指導を受ける。同期の中では最年長ということもあり、代表的役割を果たした。卒業後は開拓使に入り、開拓使の管轄していた母校の札幌農学校で農業実習を指導した。明治15年（1882）、私費でアメリカ合衆

国のジョンズ・ホプキンス大学に留学しホートン農場で農事研究に従事した。帰国後、母校の札幌農学校の教授に就任した。母校出身者初の就任者であった。海外の農業を視察し、当時進められていた北海道の農業経営を米国風の大農経営の畑作中心から中小経営の米作中心に変更した。

明治19年（1886）金子堅太郎の北海道視察の復命書によると札幌農学校は教育内容が高度のために開拓を推進する人材育成にはほど遠い等の理由から廃校か存続かが問題になったが、屯田兵の指導者を育成するための「兵科」を新設することやその後も廃校の危機を救う様々な課題等に対応し存続に努めた。

存続に当たっては既述の黒田清隆、原敬や古河財閥等の援助があった。明治40年（1907）、同校が東北帝国大学農科大学になると学長に就任。農学経済、植民学を指導した。農科大学の農学部他に医学部、工学部、理学部を有する理系総合大学へ発展させた。

大正7年（1918）に同校が北海道帝国大学に昇格し初代総長に就任。昭和5年（1930）までその職にあった。歴代道庁長官の拓殖計画の参与。佐藤は札幌農学校1期生として入学して以来退官するまでの54年間母校に籍を置いた。その間、明治24年（1891）札幌農学校校長心得となって以来、東北帝国大学農科大学、北海道帝国大学等の学長・総長等40年近く母校の充実発展に力を発揮した。その意味からも札幌農学校の「育ての親」と言われる。昭和14年（1939）6月逝去、葬儀は北海道帝国大学葬であった。墓は、札幌市の里塚霊園にある。建立は、昭和5年（1930）、佐藤の功績から銅像建立の聲が農学部を中心に起こり、募金活動が行われ、加藤顕清に依頼し制作された。金属回収令の対象となり供出され、戦後再建された。

4) 岩村 通俊

- ① 建立年 昭和8年（1933）
- ② 建立地 札幌市大通西10丁目
- ③ 制作者 本山 白雲
- ④ 設置者 「銅像建設会」総代・佐上信一
- ⑤ 岩村 通俊（1840-1915）は、1840年（天保11）現在の高知県宿毛市、土佐藩家老伊賀家の家臣岩村英俊の長男として出生。

岩村は、戊辰戦争には参謀として北陸・東北を転戦し、明治2年（1869）新設された開拓使に入る。その後、北海道庁初代長官として就任した。

このように、岩村は、北海道に2度勤務し北海道と関わりの深い人物の一人である。1度目の勤務



写真9 札幌市公文書館蔵

は、明治2年（1869）7月開拓使判官として開拓使函館出張所で勤務した。明治3年（1870）4月、札幌本府の建設を進めていた島 義勇の後任として札幌本府に勤務した。ここでは島の街づくりを引き継いだ。岩村は、大判官として、開拓使の技師中田為信に命じ、碁盤の目状で開拓使本府を起点に一里四方、東西南北各18町の町並み、中心部に幅58間、防火帯としての大通りを設け現在の都心部の原型を造らせた。更に、札幌神社（現在の北海道神宮）の運営、町づくりのための労働力確保のためのすすきの遊郭東京妓楼の建設や古い町並みを一掃するために官設の仮小屋等を焼き払った所謂御用火事を行った。

明治15年（1882）、「北京を北海道に奠むる議」、いわゆる「北京の構想」を明治政府に建議。「北京の構想」とは、夏季に天皇一家の避暑地として北の京としての上川地方、具体的には旭川市で過ごすというものであり、合わせて、この構想の実現を通して上川開発を図ることは、北門の鎖鑰として皇威隆替のかかる北海道開拓の機軸になるという意図もあった。明治18年（1885）司法大輔として永山武四郎を伴い、近文山から上川盆地を視察（国見）を行った。明治18年（1885）、北京の構想を再度建議。この構想は政府の反対にあって実現しなかった。

2度目の勤務は、明治19年（1886）1月、北海道の「函館・根室・札幌」3県を廃して、北海道庁が設置され際に初代長官として就任した。岩村は、長官としての施政方針として「・・・貧民を植えずし

て豊民を植えん・・・と説いた。具体的には北海道の開拓のための基礎調査、インフラ整備等は北海道庁が行うが、実際の開拓は資本家等に任せるといふもので、従来の開拓方針としての「直接保護政策」から「間接保護政策」へ、「官営」から「民営」へと開拓方針の大転換を図った。そのことは、本州資本が北海道に導入される契機となった。岩村の進めた主な施策は、以下の通りである。

「北海道土地払い下げ規則や北海道国有未開地処分法等を發布、殖民地選定を行い移住者の促進、官営工場の民間払い下げ、内陸部の開拓のインフラ整備として道路交通網の整備」等。明治21年（1888）6月、元老院議員に転出、その後、第1次山形内閣農商務大臣、大臣退任後宮中顧問、貴族院議員、御料局長等を歴任した。岩村のこのよう功績から、発起人総代・佐上信一（北海道庁21代長官）を中心に、故岩村男爵銅像建設会が中心となり昭和8年（1933）に銅像が建立された。（注8）金属回収令の対象となり供出され、戦後再建された。

5) 赤心社開拓功労者の像



写真10 浦河町郷土資料館蔵

- ① 建立年 昭和10年（1932）
- ② 建立地 浦河町荻伏
- ③ 制作者 本郷 新
- ④ 設置者 「実行委員会」澤 吉雄が中心
- ⑤ 「赤心社」の経営の中心的役割を果たした3人の銅像が建立されている。銅像の右から鈴木 清、西忠義、澤茂吉である。

北海道の開拓を進めるための労働力確保のために、明治政府は本州から北海道への移民政策を講じることになる。その移民の主な形態は「士族移民」、「結社移民」、「屯田兵」、「一般の移民」等であった。この中の「結社移民」の一つに「赤心社」がある。社名の「赤心社」は、「まごごろ」、「偽りのない心」を意味する。

「赤心社」は、兵庫県士族、鈴木 清中心にキリスト教徒を中心に、士族救済と北海道開拓の国策に共鳴し、株式により資金を募り、鈴木 清を社長に明治13年（1880）に設立された株式会社である。明

治13年（1880）鈴木らは道内を調査し日高国の浦河郡（現浦河町）西舎村に決め930町歩の未開地の貸付を受け翌14年（1881）5月から西荻伏や荻伏村に入植した。

当初は、開墾中心であったが農耕の不慣れ、風水害とイナゴの被害等から開墾は予定通りに進まなく、更に、経済状況の悪化等から資本金が半額に減って危機的状況になった。そうしたことからそれまでの開墾中心の方針から 既墾地の耕作、樹芸、牧畜等に重点を移す等の工夫をしながら開墾を進めた。

3人の銅像は、当時荻伏村議会議長の澤 吉雄らが呼びか、弟の茂夫が知人の本郷新に依頼し、昭和10年（1935）9月25日、荻伏の第1回開拓記念式が開催された際、開拓功労者として建立された。（注9）金属回収令の対象となり供出され、戦後再建された。

6) サラ・スミス



写真11 北星女子高校「駒草より」

- ① 建立年 昭和12年（1937）
- ② 建立地 北星女学校敷地内
- ③ 制作者 本郷 新
- ④ 設置者：創立50周年事業
- ⑤ スミス（1851-1947）は、1851年（嘉永4年）アメリカニューヨーク州で出生。

女学校卒業後ドイツ・フランスに留学。明治13年（1880）に宣教師の身で来日し東京の女学校で教鞭をとった。しかしながら体調を崩し、療養のために母国の気候の似た函館に移住。明治19年（1886）北海道尋常師範学校の外国人教師として採用された。

これを機にスミスは、「北海道の女子教育」の学校として、明治20年（1887）「札幌長老派伝道協会寄宿女学校」（札幌市北1条西6丁目）を開設した。この学校が現在の北星女学校のルーツである。北海道庁第2代岩村長官も支援したこともあり、明治22年（1889）「スミス学校」となり、明治27年（1894）新渡戸稲造の助言もあり「北星女学校」と改名した。

その教育方針は「実生活に役立つ知識の教育とキリスト教に根ざした人間形成」である昭和4年（1929）新校舎建築の際に現在地（札幌市南4,西17）に移転。昭和18（1943）年北星高等女学校と改称。その後、高校、短大、4年生の大学へと発展し現在に至る。昭和35年（1960）市民の投票で選ばれた「札幌の木」のライラックは、明治23年（1890）、スミスが故郷のアメリカからもってきた苗木がその始まりだと言われている。

スミスの胸像は昭和12年（1937）北星女学校創立50周年記念事業の一環として建立された。（註10）金属回収令の対象となり供出された。戦後、再建された。

7) 岩村 通俊



写真12 「故岩村男爵銅像建設委員会から転載」

- ① 建立年 昭和13年（1938）
- ② 建立地 旭川市常盤公園

- ③ 制作者 本山 白雲
- ④ 設置者 建設委員会
- ⑤ 岩村 通俊（1840-1915）の経歴は、前掲のとおりで割愛した。岩村は、開拓使時代の明治5年（1872）、上川方面の開拓の重要性を唱え、開拓使官吏、高畑利宣に調査をさせた。高畑は、調査結果を「石狩川実地検測図」にまとめた。

このように上川方面の開拓の重要性を訴え、調査を命ずる等の功績から故岩村通俊胸像建設委員会が中心となり建立された。（注11）金属回収令の対象となり供出され、戦後再建された。

8) 依田 勉三



写真13 帯広の森百年記念館蔵

- ① 建立年 昭和16年（1941）
- ② 建立地 帯広市帯広神社
- ③ 制作者 田嶋 碩朗
- ④ 設置者 「実行委員会」代表・中島武一
- ⑤ 依田 勉三（1853-1925）は、伊豆国大沢村の豪農、依田善右衛門の三男として出生。

22歳で慶応義塾に入塾するが2年で退塾した。明治14年（1881）、結婚を機に、当時未開の地であった北海道を開拓しようと志を固め北海道の各地を調査し、十勝国オベリベリ（現在の下帯広）を開墾予定地と定め、移民団を募った。明治16年（1883）5月、晩成社を設立。晩成社の社名は、大器晩成に由来する。

依田家他12戸がオベリベリ入植。農業経営は、自然条件の厳しさ、野火、バツタの被害等から収穫

はあがらなかった。その後も馬の導入，羊や豚の飼育によるハムの製造，馬鈴薯による澱粉の研究，リンゴの栽培，水稻の試作，函館で肉店の開店等も取り組むが，ほとんどは失敗し，晩成社は創業50年を迎えた昭和7年（1932）解散した。しかしながらそうした試行の結果が現在の十勝の諸産業の源流になっている。

依田の事業は道半ばで終焉を迎えたが，その不屈の精神と先見性等の功績が認めた中島武市氏（帯広市議会議員：シンガーソングライター中島みゆきの祖父）が建立を呼び掛けた。その時の言葉が「何か十勝の人々に直感的に目標になるものと考えた結果」と述べている。（注12）

昭和13年（1938），開道70周年を記念し，北海道神宮内に北海道の開拓に尽力した人物の功績を讃え，開拓神社が創建された。しかしながら，創建当初，依田の名前はなかったが，戦後，昭和29年（1954）当時の帯広市長の要請で依田も加えられた。金属回収令の対象となり供出され，戦後再建された。

9) 伊藤長右衛門



写真14 「伊藤長右衛門君記念事業報告」から転載

- ① 建立年 昭和16年（1941）
- ② 建立地 小樽公園
- ③ 制作者 田嶋 碩朗
- ④ 設置者：建立委員会

伊藤長右衛門（1875－1939）は，明治8年（1875），現在の福井県大野市で出生。

東京帝国大学に入学し，既述の広井勇教授と出会

い，指導を受ける。明治35年（1902）東京帝国大学土木工学科を卒業後，広井の勧めで北海道庁に勤務した。退官するまでの間，留萌港，室蘭港，函館港の所長を歴任し港湾建設に関わった。その間，明治42年（1909）に第3代小樽築港事務所長に就任した。

伊藤は，明治41年（1908）4月第二期工事として，南防波堤の建設に着手し，大正元年（1912）には従来のブロックに替わってケーソンを用い，スチームクレーンを設置する，後に傾斜式ケーソンドックと呼ばれ港湾工事史に特筆する功績を残した。大正10年（1921）着工から13年間の歳月をかけ南防波堤が完成した。既述の広井勇の設計した北防波堤の2つの防波堤により，小樽港を南北3.5km以上を防波堤で守ることになり，小樽港は北海道の良港として拠点港となった。

小樽港湾生みの親は広井勇，育ての親は伊藤長右衛門と言われた。小樽が北のウォール街とよばれ程に発展した要因として南北防波堤の建設とともに港の整備があった事は大きかった。

このような功績を永久に記念するために昭和15年6月「故伊藤長右衛門氏銅像建立発起人一同」名で建立の取り組みが行われ昭和16年（1941）完成した。（注13）金属回収令の対象となり供出され，戦後再建された。

10) 木下成太郎



写真15・著者撮影

- ① 建立年 昭和16年（1941）
- ② 建立地 札幌中島公園

- ③ 制作者 朝倉 文夫
- ④ 設置者 木下成太郎翁顕彰会
- ⑤ 木下成太郎 (1865-1942) は、1865年 (慶応元年) 但馬国の豊岡藩家老・木下弥八郎の長男として出生。宝林義塾で漢学を修め、更に大学予備門で学んだ。自由民権運動に加わり自由党に入党。明治20年 (1887) 保安条例により東京外三里に追放されたために、父が在住していた 室蘭市に移住。その後、厚岸に移り農業、牧畜業を経営。

明治33年 (1900) 厚岸町議員を皮切りに道会議員、大正元年 (1912) 第11回衆議院選挙で北海道根室外三支庁から出馬し当選。衆議院議員を7期務めた。

青年期から美術を理解し、昭和4年 (1929)、帝国美術開校 (現、武蔵野美術大学) 校主であった。

また、大東文化大学の創設に関わった。

○金属回収令より免れた像

戦時中、銅像の大部分が金属回収令の対象となり供出し解体されたが、著者等が調査した銅像の中で唯一、供出を免れた銅像である。理由について、黒川は「木下は、道議員として、中央から任命された道庁長官に道会で対抗し、帝国議会では代議士として北海道の殖産振興と厚生復興等を建議した。木下の寿像は、内地の政権に向けての札幌の政治・行政関係者ばかりでなく、道内の各市町村の人々の心情表明としての意義を有し、これを供出しないことの黙認を、道庁内部ばかりでなく、軍関係者を含む、中央諸機関の札幌の出先機関も黙認したのであろう」と記述している。(註14)

製作者が早稲田大学の大隈重信像 (供出を免れている) を作成した日本の彫刻界の草分け的存在である、朝倉文夫であった事も背景にあるかもしれない。

戦時 每户ぞか活へ銅と鐵

品名	買上値	買取
銅	1000	1000
鐵	500	500
...

鐵と銅は、国防の要である。...

写真16 金属提出のちらし

Ⅲ. 考 察

1. 時代における特徴

我が国の銅像の建立は明治20年代頃から本格的に始まり、昭和初期における銅像設置数は、日本全体で700点ほど設置されている。

1) 明治期

北海道においては全国から少し遅れるが、明治36年 (1903) に北海道初の黒田清隆像が建立された。黒田像をはじめとして5体の銅像が建立され、その5体全員が薩摩藩の出身であった。2名は開拓長官等の北海道の行政長で、他の3人は軍人であった。

建立にあたり、黒田像、永山像等は彼等を讃える政治家、軍人等の関連した実業家等が中心に「銅像建立委員会」等を設立し取り組まれた。しかし、東郷像と大山像の建立は前述したように観光客を誘致するためであった。この時代の銅像は、開拓行政の基盤を讃えたり戦争に関するものであった。

2) 大正期

大正時代に建立されたのは、クラーク像の1体であり、初の外国人であり、教育者であった。クラーク像の建立は、札幌農学校 (当時は北海道帝国大学) 開校50周年記念事業の一環として制作された。



写真17 初代クラーク像除幕式

3) 昭和期

今回紹介できた昭和時代建立の数は10体であり、5つの分野に大別した。

- ①技術者：広井像、伊藤像は港湾施設としての小樽港をはじめとする防波堤の設計・建設等の技術者である。
- ②開拓者：十勝の依田像、浦河の赤心社像は、移民開拓のリーダーである。
- ③産業功労者：道北の名所である層雲峡の開発を進め

た荒井像等実業家である。彼の活動は、今日の北海道における地域の産業や観光の拠点になっている。

④教育者：佐藤像，スミス像，木下像である。

他に、今回紹介できなかった、山田幸太郎（札幌一中校長：現札幌南高等学校）がいる。昭和8年の建立であるが供出された。戦後昭和25年に札幌南高校の敷地に再建された。

⑤行政官：岩村のように札幌・旭川の2か所に建立された人物もいる。主たる理由は札幌の像は札幌の町作りを行った行政官、旭川の像は上川及び旭川の開拓、北見構想等地域・振興に尽力した功績を讃えたことによると考えられる。

昭和年代に入ると戦時体制の進行下、戦意高揚のためにその一例として昭和7年（1932）に建立された「小口小平」や「肉弾三勇士」等の像があるが、こうした傾向は北海道にはみられなかった。

今回紹介できなかった、札幌市の第2代目の市長である橋本正治がいる。昭和2年（1927）に札幌市長に就任し、上下水道の基盤整備に努め、札幌名誉市民として生涯を終え、供出後に再建された像は、藻岩浄水場の跡地の水道記念館に立っている。

最後になるが、紙面の関係で掲載できなかった人物の名前だけを挙げる。①（鉄道功労者）：明治13年の手宮一札幌間の鉄道敷設など北海道の鉄道敷設に貢献したクロフォード。同じく松本荘一郎、平井晴二郎。（三人は日本で2番に完成した函館の上水道も設計）②（札幌の市電など、交通・運輸産業発展に貢献）助川貞次郎。

③（北海道の老舗のデパート：今井丸井の創始者）今井藤七。④（小樽発展の基礎づくりに貢献）北垣国道。⑤（函館の教育に尽力した、旧函館寶小学校長）長尾 含。

2. 北海道開拓の視点と今後の課題

1) 功績分野の変化

北海道の開拓の視点からは、初期の銅像は開拓使を中心とした行政制度の設計の人物やクラーク像の様に開拓の基礎を作った教育者で、全道的な影響を与えた人物像が中心であった。その後時代を経て、各地域の開拓や産業の基盤を作った人物へと移行し、教育の分野でも同じ傾向がみられる。

2) 設置母体の変化

設置母体は、当初、官や利害関係にあった人が中心の母体から、尊敬の念から顕彰しようとする、多くの人が参画する委員会へと、母体が変化していくことが伺える。時代の思潮もあろうが、設置母体が限られた人に寄ったことにより、開拓使に関わった人や軍人は戦後再建されなかったことから伺えよう。

3) 設置場所の変化

明治・大正年代の像は、北海道の開拓・開発が札幌を中心であった事から、札幌の地に多かった。北海道の開拓・開発の進展に伴って、札幌以外の小樽、旭川、帯広、浦河、上川等地方に建立されたことは、地域貢献の人物に視点が移り、全道的な開発の波が拡大していった結果と考える。

4) 今後の課題

戦前に建立され供出・解体された銅像が、戦後、どのような経緯で再建されたのかの過程を検証したい。更には、戦後に建立された銅像には、どのような特徴があるのか等に関し論考を試みたい。

（令和4年7月4日・記）

注

- 注1 「故従一位大勳位黒田伯爵銅像建設報告」
- 注2 七飯村教育会編「七飯村史」：「明治39年7月14日、有志相謀り、大山・東郷両大將銅像及び忠魂碑建立せり」と明記されている。
- 注3 大迫將軍銅像竣工報告書
- 注4 故永山將軍銅像建設費決算書
- 注5 岩沢健蔵著「北大歴史散歩」北海道大学図書刊行会
- 注6 廣井勇先生胸像企画委員会
- 注7 荒井建設百二十年史
- 注8 故岩村男爵銅像建設委員会
- 注9 北海道青少年業書（13）荒井良夫著「北国に光を掲げた人々」（赤心社の内容）
- 注10 「駒草」は同窓会誌の名称で、胸像写真は「創立50周年記念号」からの転載。
- 注11 上川開発と岩村通俊卿
- 注12 依田勉三伝刊行会「拓聖 依田勉三伝」 1969
- 注13 故伊藤長右衛門君記念事業報告
- 注14 黒川弘毅「北の武蔵野美術大学創立90周年記念 朝倉文夫作《木下成太郎先生像》の保存」について：武蔵野美術大学研究紀要NO51

IV. 参考文献

- 1) 大西雄三著：実録北海博徒伝，昭和55年みやま書房
- 2) 金沢治夫著：日本の銅像，淡交社
- 3) 札幌市教育委員会編 さっぽろ文庫21「札幌の彫刻」
- 4) 札幌市教育委員会編 さっぽろ文庫66「札幌人名事典」
- 5) 偉人の銅像写真集，やまゆ書房
- 6) 渡部昇一監修 丸岡慎弥著：日本の心は銅像にあった，育鵬社，2015
- 7) 墨 威宏著：銅像歴史散歩，筑摩書房，2016